【礼拝賛美】イエスの血潮で
（★→※→★の順序で歌う）
★イエスの血潮で　救われ　いやされ
天の御国へと　導かれる
イエスの血潮で　赦され　満たされ
尊い　その血潮で
※天の父と　こひつじイエス
ひざまずき歌う　聖なる御名
全地は歌う　あがないの歌
栄光は主にあれ

【世界の傷んでいる人々に心を向け祈りましょう】

・7月秋田豪雨被害　秋田市内で教会が浸水被害に遭いました。キリスト教支援団体クラッシュジャパンなどが協力して復旧支援に当たっています。

・ハワイ・マウイ島大火　キリスト教支援団体も復旧支援に当たっています。まだ水道水が使えない地域もあり浄水システムを提供しています。また発電機やコンロなどを配布しているとのこと。

・ミモザ会の取手シオン訪問
先週、予定通りに出掛けました。直前に都合で行かれなくなった姉妹方もあり、10名での訪問でした。礼拝出席、その後は新会堂建築の経緯について紹介もあり、神様の御業を覚える幸いな時だったと報告がありました。感謝します。

№23　2023・9・3

シオン・キリスト教会
創立89周年

このことばを聞いたとき、私は座り込んで泣き、数日の間嘆き悲しみ、断食して天の神の前に祈った。
ネヘミヤ記　1章4節

どうか、あなたの耳を傾け、あなたの目を開いて、このしもべの祈りを聞いてください。私は今、あなたのしもべイスラエルの子らのために、昼も夜も御前に祈り、私たちがあなたに対して犯した、イスラエルの子らの罪を告白しています。まことに、私も私の父の家も罪を犯しました。
同　1章6節

ネヘミヤ記は、「エルサレムの城壁再建」と「イスラエル人を神の民として建て上げる」という二つの課題に取り組んだネヘミヤの働きが記録されています。それは容易なことではありませんでした。しかしネヘミヤは困難を乗り越えながら生涯をかけて取り組み続けました。私たちもキリストの体である教会を建て上げるために召された者としてネヘミヤに学びたいと思います。

ネヘミヤに見る教会を建て上げる人の特徴とはどういうものでしょうか。

一つは、人々の痛みを知ることです（3，4）。ネヘミヤは遠く離れたエルサレムの痛みを知り、嘆き悲しみました。ネヘミヤの働きの源にあったのは、その時代とそこに生きる人々が抱える痛みに対する問題意識です。健全な問題意識は使命感を生みます。また、人々が何を悩んでいるのかを的確に捉えなければ、適切な対応には至りません。私たちも、今の時代に人々が何を悩み、どのような現象が起こっているのかを知ることが必要です。

二つには、世の痛みを覚えて祈ることです（4）。問題意識を抱いたネヘミヤは、まず祈りました。問題があるなら解決を目指して取り組まなければ状況は変わりません。だから人はすぐに行動を起こそうとします。しかし、信仰者はまず祈ることが肝心です。問題に対して、主が何を願い、私に何を求めているのか。信仰者は主の前に座し、主の御心を求めることから始めます。そうして神の働きを担うよう導いていただくのです。

三つ目は献身です。ネヘミヤは「私も私の父の家も罪を犯しました」（6）と祈りました。彼は捕囚の原因となる罪を犯していません。しかし彼は問題を誰かのせいにせず自分の事として背負いました。ここに人の罪を十字架で背負ったキリストの心を見ます。このような人によって神の働きは担われ、教会は建て上げられるのです。（泰）

9月3日　創立89周年記念聖日礼拝

第1礼拝　9時　荻野牧師　荻野し兄
第2礼拝　11時　吉田潔兄　髙橋美姉

招　　詞　イザヤ書49章13節
会衆賛美　聖歌134
会衆賛美　イエスの血潮で
（歌詞は週報4面に掲載）
主の祈り
交　　読　詩篇106篇1～8節
礼拝祈祷
使徒信条
聖書朗読　ネヘミヤ記1章1～11節
説　　教　教会を建て上げる人
荻野泰弘牧師
聖　餐　式（第2礼拝）
会衆賛美　聖歌614
献　　金
頌　　栄　聖歌376
祝　　祷
祈りのとき（第2礼拝）
報告
後奏　感謝祈祷
※第1礼拝は礼拝後に聖餐式

【招　詞（主の招きのことば）】

イザヤ書49章13節
「天よ、喜びの声をあげよ。地よ、小躍りせよ。山々よ、歓喜の声をあげよ。主がご自分の民を慰め、その苦しむ者をあわれまれるからだ。」アーメン

【本日の予定】

■会堂清掃　第1・第2礼拝　終了後

■小学科礼拝　3階　11時

■ホザナ礼拝　3階　11時

■バイブルカフェ
談話室　12時15分

■ミモザ会例会
第2礼拝後　外部へ出掛けます

【本日の礼拝奉仕者】

■第1礼拝
礼拝祈祷　司会者
聖書朗読　司会者
献金1階
献金祈祷　司会者
報告
受付
配信　配信チーム

■第2礼拝
礼拝祈祷
聖書朗読
献金1階
献金1階
2階
献金祈祷　司会者
報告　荻野牧師
会場
受付

【次週の礼拝説教】
プレイズサンデー
〔説教者〕荻野牧師

■89年前を振り返る

1934年（昭和9年）、岸田愛治牧師と初子牧師の夫妻は蒲田にて開拓伝道を開始。シオン・キリスト教会（当時は「基督宣教会」と名乗っていました）が設立されました。ただ主に信頼しての出発でした。当時の様子を創立者が記しています。

「その頃の蒲田（大田区といっていない時代）は人口十二万といっていた。東海道方面と東北方面からの勤労者が多かったようである。私は、大衆層に救霊の手をのべることを上より示された。結婚したての私共夫婦が意を強くして駅前のうどん屋で腹ごしらえをして、貸家探しから始めた。何しろ後の支援もなく、ただ二人きりの出発であった。自給だなんて生やさしいものではなかったのである。生くるも死ぬるにも、ただ聖名の崇められんことを真剣に願い、うしろの橋をきって救霊一路前進したのである。大太鼓一個が伝道の武器。あとは天より賜った地声のみ。神は、かかる出発に目をとめてくださっていた。」

（創立40周年記念誌より）

■第2礼拝後の「祈りのとき」と「記念品」のこと

▼毎年、創立記念に際しては、教職者に記念品が渡されていました。シオンの良き習わしとして教職者を大事にしてくださいます。これはありがたいことです。けれども、教職者だけが記念品をいただくと、どこかで〝教会は牧師のもの〟という認識が広がらないかと懸念します。

▼今年は、牧師から役員会に提案し、創立記念では教職者にモノを渡すのではなく、教職者と信徒で互いに〝祈りのプレゼント〟をするということに致しました。教会は、主に呼び集められて、今ここに加えられた教職者を含めた兄弟姉妹全員が担うものです。今ここに共に集められたことを感謝し、教職者は信徒のために、信徒の代表者が教職者のために祈ることで、主への感謝と互いへの愛を現したいと思います。

▼私たちが一つであることの現れとして、記念品は全員が同じものを分かち合います。それで今年は〝ボールペン〟にしました。とても書きやすいですよ。

【小学科キャンプ報告】

皆さまのお祈りをいただき、4年ぶりに小学科キャンプを行うことができました。楽しいゲームや工作、そして友だちと遊ぶ中で、蒲田と茅ヶ崎という垣根を越えて、主にある関係を深めることができました。

正直を言うと、4年ぶりの開催で、お友達同士の関係はどうなるかという心配もありました。けれどもそうしたことが吹き飛ぶほどに良い関係を築き、別れるときには「また会おうね」と約束をしていました。

また、バイブルタイムではダニエルの話しや賛美を通して、一人ひとりが神さまをより近くに感じることができました。特に賛美は大きな声が響き渡り、子どもたちの喜びをひしひしと感じました。

天候や健康も守られ、箱根仙石原の涼しいホテルで楽しく過ごしたあっという間の2日間でした。

子どもたちが家に帰ってからは、ご家族から感謝のメールもいただきとても励まされました。

支えてくださった主に感謝し、主の御名に栄光を帰します。